

韓国古物商街のフィールドワーク

－ソウル市仁寺洞の中の日本・中国・北朝鮮－

(財)元興寺文化財研究所 角南 聡一郎

1. はじめに

報告者は、共同研究助成による調査で、2010年3月5日～3月8日まで、ソウル市においてフィールドワークを実施した。特に現地では、共同研究メンバーである太田心平氏と、韓国外国語大学校・中村八重氏のご協力を賜った。

仁寺洞（インサドン、인사동）はソウル市鍾路区にある、著名な観光地の一つである。ここには、毎日外国人観光客や国内観光客が多く訪れる。本調査の目的は、以下の通りである。仁寺洞に所在する古物商で販売されているモノ（骨董品）を観察する。ここで販売されているのは、韓国のモノが大多数であるが、日本、中国、北朝鮮など東アジア諸国とされる商品も並んでいる。これらをサンプリングしてどのようなものが販売されているかを観察する。また、観光客にとって、韓国をはじめとした東アジアの骨董品は、どのように捉えられているかについても考察を加えてみたい。

骨董品を人類学的研究対象とした先行研究には、厦門で調査をおこなった香港中文大学・張展鴻氏による論考がある(CHEUNG 2002, 張 2003)。

2. 仁寺洞古物商街の形成

<李朝時代> 北村（プッチョン）と鍾路（チョンノ）の間にあるこのエリアはもともと中人（李朝時代の貴族と庶民の中間階級の人）が住んでいた住宅街で、李朝時代初期から美術活動の中心地として栄えてきた。

<1930年代> インサドンギル（仁寺洞メインストリート）周辺に書籍、古美術に関連した商店街が建ち並びはじめ、骨董品通りとして知られるようになった。

<1950年代> 6.25戦争（朝鮮戦争）以降、現在の楽園商街アパートの場所に楽園市場ができ、その後ピョンヤントッチッ（平壤餅屋）ができてから数軒の餅屋が建ち並び、今の「トッチッコルモツ（餅屋通り）」ができあがったとされる。

<1970年代> 最初の近代ギャラリーである現代画廊が開館すると、常設の展示販売場形式の画廊が次々とでき、ギャラリー通りとしても知られるようになった。

<1980年以降> 骨董品、古美術、画廊、古家具店、民俗工芸品店など続々と出店され、名実ともに伝統文化芸術活動の中心地になった。また、1986年に大学路が文化芸術ストリートとして指定された後、1988年には仁寺洞が「伝統文化ストリート」に指定された。

3. 店頭商品にみられる国外のモノ

日本 絵葉書 銭貨

中国 漢族の民具 チベットの仏具

北朝鮮 紙幣

古物商・K氏の話

「戦後、日本人が引き上げる際に、骨董品を韓国で処分したことはあったろう。それは、釜山、郡山など日本人が多かった場所に当然多いのではないか。日本時代の民具は、ほとんど現存していないだろう。戦後、アメリカ軍が韓国に入った際、日本の錦絵などは、アメリカ人のコレクターなどによってアメリカに持ち帰られた。当時の韓国では日本のものには価値が無いに等しい状況であったので、かなり安価で入手できたのではないか。また、朝鮮戦争によって韓国が戦乱状態であったため、多くのモノは失われてしまったであろう。」

4. 今後の展望

【引用・参考文献】

CHEUNG ,Sidney C. H. 2002 *Observations on the Antiquities Trade in China: A Case Study of Xiamen's Antique Arcade*. HKIAPS Occasional Paper No. 128. Hong Kong: Hong Kong Institute of Asia-Pacific Studies, The Chinese University of Hong Kong, pp.1-20.

張展鴻 2003 「中国のある古美術品取引の観察」『中国 21』17 東方書店 pp. 51-66

「仁寺洞の歴史と遺跡」『ソウルナビ』

<http://www.seoulnavi.com/special/5003616>